



## There構文のカテゴリー分析

著者	緒方 隆文
雑誌名	人間文化研究所年報
号	26
ページ	77-91
発行年	2015-08-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1219/00000493/">http://id.nii.ac.jp/1219/00000493/</a>

# There 構文のカテゴリー分析

緒 方 隆 文

## A Categorical Approach to Existential Sentences

Takafumi OGATA

### 1. はじめに

存在を表す there 構文は基本表現の一つであり、これまでに様々な観点から研究がなされてきた (Milsark 1974, Kimball 1973, Bolinger 1977, Rando & Napoli 1978, Lumsden 1988, Birner & Ward 1993, McNally 1998, etc.). 本稿ではカテゴリーの観点から、there 構文を考察する。ここでの結論は、「there 構文とは、特定の成員を含むカテゴリーに関わる情報を、聞き手の新情報として、話し手が提示する構文である」ことを示すことにある。

ここでいうカテゴリーは、何らかの理由で成員がグループ化されたものを指す。カテゴリー性が弱いものまで含めていく。そしてカテゴリー性に強弱の違いがあることを示し、変項という概念が関わることを見ていく。例外的に扱われがちなりスト存在文も含め、there 構文に統一的な分析を試みていく。ここで課せられる制約は、上記の結論のみで、定性制限や一時性の問題などすべて別個に制約を設ける必要がないと主張していく。

### 2. there 構文

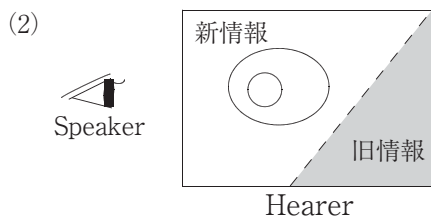
there 構文は、聞き手に新情報を提示する構文である。代表的なものに、場所や時間に何かが存在する (1) のような文がある。(1) では話し手からの視点で、場所[at the door]に〈a friend of yours〉が、時間[on Sunday]に〈one concert〉が存在することを聞き手に新情報として提示している。

(1) a. There's a friend of yours at the door.

b. There's one concert on Sunday.

(Huddleston & Pullum 2002: 1394)

本稿は、こうしたことをカテゴリーを通して考える。場所や時間という〈カテゴリー〉の中に、意味上の主語名詞句が〈成員〉として存在することを、新情報として提示していると考え。図示したものが(2)になる。(2)では、カテゴリーと成員が新情報になっている(楕円がカテゴリー、円が成員を表す)。



しかし there 構文は(2)のような単純なものだけではない。場所表現を伴う場合と伴わない場合がある。後置修飾語がある場合とない場合がある。変項を含む場合と含まない場合がある。よって(2)は there 構文の一例にすぎない。

本稿は、こうした多様性に対して、カテゴリーの概念を中心に、新情報と旧情報、及び変項の概念を通して考察する。結論として(3)を主張する。

(3) there 構文とは、特定の成員を含むカテゴリーに関わる情報を、聞き手の新情報として、話し手が提示する構文である。

まず「特定の成員を含むカテゴリー」であるが、there 構文では、意味上の主語名詞句が成員となり、それが属するカテゴリーが必ず存在すると考える。カテゴリーはほとんどが主語名詞句の後置修飾語になるが、それ以外のことも、表現されないこともある。表現されない場合は、文脈から推測され復元可能であったり、カテゴリー自体が弱いために省略されている。そのため表現されていなくとも、カテゴリーは存在し、その中に主語名詞句が成員として存在すると考える。

次に「関わる情報を聞き手の新情報として提示する」であるが、必ずしも(2)のように、成員とそのカテゴリーが新情報になるわけではない。とりわけ変項を含む場合には、カテゴリーと成員(変項)は旧情報に位置し、変項の値が新情報となる。リスト存在文では、カテゴリーと成員(変項)、そして変項の値までも旧情報に位置することもある。この場合、変項とその値を結ぶリンク線が新情報になる。つまり新情報は、単にカテゴリーとその成員に関わる情報でありさえすればよいとの主張になる。

結論(3)では、カテゴリーが中心的な働きをする。カテゴリーを用いることで、成員とカテゴリーとの帰属度、言い換えれば一体感の程度の違いも示すことが可能となる。また特別扱いされがちなりスト存在文も含めた形で、統一的に there 構文を分析できる\*1。次節以降、3節で there 構文に現れる動詞、4節で意味上の主語名詞句を見ていく。そして5節で実在文を見ていく。

### 3. there 構文に現れる動詞

there 構文の動詞は、非対格動詞と言われる。代表的な動詞はむしろ be 動詞であるが、それ

以外にも存在・出現を表す動詞が there 構文に現れる (cf. Kimball 1973他)。それに移動動詞を含める場合もある。鈴木・安井(1994)がまとめたものを次に示す(鈴木・安井 1994:150)。

- (4) 存在の動詞 (verb of existence) : dwell, exist, hang, lie, live, remain, reside, stand, survive, etc.  
a. There exist several alternatives.      b. At the edge of the forest there lived an old man.
- (5) 出現の動詞 (verb of appearance) : appear, arise, begin, burst, develop, emerge, ensue, follow, grow, happen, loom, occur, open, return, spring up, take place, etc.  
a. There arose a conflict.                      b. There ensued a dispute.
- (6) 移動動詞 (verb of motion) : approach, arrive, come, enter, fly, go, run, tread, walk, etc.  
a. There came three suspicious-looking men down the street.  
b. Along the river there walked an old woman.

(6)で移動動詞が加わっているが、これは出現動詞の一種と考えられる。つまり主語名詞句がカテゴリー内へ移動した結果、カテゴリー内に存在することになったと考えられる。そのため移動だけを表しているのではなく、同時に存在の意味もある。よって本稿では、存在を表す動詞と、出現を表す動詞の2つのみがあると考え。ちなみに消滅を表す動詞は(7)に示すように存在文に生じることはない。

- (7) a. \*There died an old man in the village.      b. \*There disappeared a stranger. (松井 2004:2)  
There 構文では非対格動詞が現れるので、非対格動詞でない非能格動詞、他動詞は不適格になるとされてきた。(8)は非能格動詞、(9)は他動詞の例である。どちらも非対格動詞でないため非文と見なされた。

- (8) a. \*There danced a young girl in the ballroom.  
b. \*There laughed several students during the lecture.  
c. \*There played three children in the playground. (高見・久野 2002:35)

- (9) a. \*There hit the dog John.      b. \*There read three books the boy. (松井 2004:3)  
しかしながら、非対格動詞でなくても適格な there 構文があることは、研究者たちによって数多く指摘されている。(10)は非能格動詞、(11)は他動詞の there 構文になる。

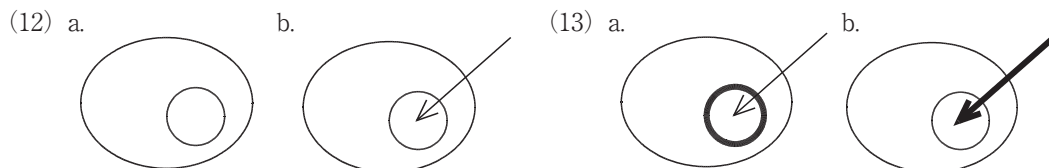
- (10) a. Suddenly there *ran* out of the bushes a grizzly bear.  
b. Then there *danced* towards us a couple dressed like Napoleon and Josephine.  
c. There *walked* into the courtroom two people I had thought were dead.  
(高見・久野 2002:39-40)

- (11) a. There reached his ear the sound of voices and laughter.  
b. There entered the room an indescribably malodorous breath of air.  
c. There crossed her mind a most horrible thought. (Kayne 1979:715)

そのため非対格動詞が選ばれるのは単なる傾向であって、制約ではないことがわかる。安藤(2005:764)は、適格な場合、いずれの動詞であっても存在・出現の意味を持つことから、「出身が自動詞・非能格動詞・他動詞たるを問わず、〈存在・出現〉の動詞は、おしなべて非対格動詞と

見ることができる」と述べている。

本稿では非対格動詞かどうかという規準ではなく、カテゴリー分析によって説明を試みる。there 構文は(3)に示したように、特定の成員を含むカテゴリーに関わる情報を、聞き手の新情報として、話し手が提示する構文である。動詞に関して言えば、カテゴリーと成員の関係は、(12)の2種類があると考えられる。(12a)は単に存在を表すものでbe動詞に加え、(4)のような動詞がある。一方(12b)は結果として存在することを表す[出現]を表しており、(5)(6)にあげた動詞が入る\*2。



(12b)はさらに焦点の当たり方で、(13)のように2つに細分される。(5)の動詞が出現動詞(13a)で、移動の概念が弱く、存在していなかったものが存在することを表す。そのため移動(矢印部分)ではなく、成員に焦点があたる(焦点は太線部分)。一方(6)の動詞が移動動詞(13b)で、結果として成員がカテゴリー内に存在することを表し、移動(矢印部分)に焦点があたる。重要なのは非対格動詞であるかどうかではなく、成員がカテゴリー内に(結果として)存在しているかどうかである。[存在]はそのまま存在であるし、[出現]は焦点の違いはあるが、結果として存在することを表す。

具体的には、非能格動詞(10)では方向を表す前置詞句が前置されることで、方向性がうまれる(矢印部分に焦点)\*3。そして行為をしながら移動することで、その結果、カテゴリー(前置詞句)に、主語名詞句が成員として存在することを提示する。スキーマは(13b)になる。

一方不適格な(8)の例では、そこには存在というより行為しかない。移動の表現がないので、移動してきてカテゴリー(前置詞句他)に結果として存在することを意味しない。そもそも there 構文は成員(ここでは主語名詞句)が、カテゴリー内に存在することを提示する構文である。存在が前面に出れば、動作があっても何ら問題はない。

ここで(14)は一見非能格動詞が移動表現も伴わず、行為だけを表しているかに見える。

(14) There once *ruled* a king who had no ears. (高見・久野 2002:44)

しかしここでも〈a king〉が、どこかに存在していることを提示する表現になっている。場所を表すカテゴリー自体は、文脈から推測できるため省略されていると考えられる。そのため後置修飾語〈who had no ears〉も動詞〈rule〉も、[耳がない]、[支配している]という主語名詞句の属性を単に表しているに過ぎない。つまり主語名詞句は、存在するモノとして提示されるにすぎない。確かに(14)の主語名詞句(a king)には、動作主性が感じられる。しかし、動作主性よりも、カテゴリー内に存在するモノ(成員)としての性格がより強い((12a)のパターンに属する)。動作主性や意思性があるからと言ってそのまま、there 構文で排除されるわけではない。(3)にあるようにカテゴリー内に成員が存在していることを提示されているかどうか重要なのである。

最後に他動詞(11)では目的語(his ear / her mind / the room)がカテゴリーになっており、その中に後続する意味上の主語名詞句が移動して存在することを示している。(13b)のスキーマであることから、適格な表現となる。一方不適格な(9)の目的語(the dog / three books)は、主語名詞句を成員とするカテゴリーになり得ない。行為の対象にすぎないからである。よって不適格となる。

## 4. 意味上の主語名詞句

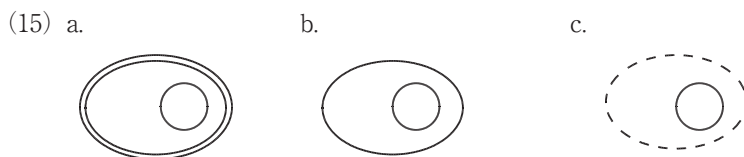
意味上の主語名詞句については、まず定性制限の問題がある。定名詞句が主語の名詞句に現れることができないという制約である。しかしながら定名詞句を主語名詞句にとる there 構文は数多く報告されている。この定名詞句をとる there 構文を4.3節でみる。そしてそれ以外の一時性の問題や全称数量詞の問題については、4.4節で考察することとする。

しかしながら定性制限や一時性の問題などを考察するには、道具立てとして、成員とカテゴリーの関係、及び変項についてまず見ていく必要がある。各々4.1節、4.2節で最初に取り上げて考えていくこととする。

### 4.1 成員とカテゴリーの関係

まず成員とカテゴリーの関係を考えたい。2節で there 構文には、特定の成員と、それを含むカテゴリーが存在すると述べた。意味上の主語名詞句が成員となり、主語名詞句に後続する後置修飾語に相当するところが基本、カテゴリー部分になる。後置修飾語が省略されていたり、後置修飾語以外がカテゴリーになり省略される場合でも、カテゴリー自体は存在すると考える。というも存在するためには、存在する場所は必ずなければならないからである。

このとき成員(主語の名詞句)とカテゴリー(主に後置修飾語)の関係は、その緊密度ひいては一体感に違いがある。これを図示したものが(15)で、(15a)は強固につながっており不可分な関係(二重線)、(15b)は通常の関係(一重線)、(15c)はかなりゆるい関係(破線)を示している。



具体例を通して考えると(15a)に相当する例が(16a)で、後置修飾語(of the city)が名詞(destruction)を強く限定しているために定冠詞がついている(cf. 4.3.1)。成員(主語名詞句)とカテゴリー(後置修飾語)の結びつきは強い。(15b)に対する(16b)では、ただ単に場所にモノが存在していることを述べており、通常の関係になっている。このとき成員とカテゴリーは(15a)ほどの一体感はなく、主語名詞句と後置修飾語は分離している。(15c)に相当するのが(16c)で、後置修飾語自体が表現されていない。

- (16) a. There happened the destruction of the city by the guerrilla yesterday. (鈴木 1977:85)  
 b. There are some strangers in his house.  
 c. There was a sudden noise. (Quirk *et al.* 1985:1406)

(15c)のパターンには2種類ある。一つは文脈から推測されるため省略しても十分復元可能な場合で、カテゴリーが省略される。もう一つはカテゴリー自体が意識されないくらい、成員とカテゴリーの関係が弱い場合がある。この場合も、同様に表現されない。

とはいえ(17a)にあるように、あえて言い表せばという感覚で、in the universeを付け足せるように、カテゴリーは必ずある。実際(17b)のようにカテゴリーを明記して違うものに変えることもできる。存在するには、存在する場所(カテゴリー)が必ずなければならない。

- (17) a. There is a God (in the universe). (Quirk *et al.* 1985:1406)  
 b. There's a boy wizard in a fantasy world.

ここで確認しなければならないことがある。以下述べるように、ほとんどの場合、後置修飾語がカテゴリーになる。しかし必ずしも後置修飾語=カテゴリーではない。後置修飾語が単に主語名詞句の属性を表したりして、別のものがカテゴリーであったり、表現されていない場合もある。

## 4.2 変項

ここで変項について考察したい。西山(1994他)は存在文の分析に変項という概念を用いている。すなわち値が定まらない変項( $x$ )をもつ場合があるとする。本稿のカテゴリー分析でも、同様に変項の概念を用いていく。例えば(18)Bには変項( $x$ )がある。ドアを支えて開けておくために使うものが何かというのが変項( $x$ )になっており、その値がthe bookになる。

- (18) A: What can I use to prop open the door?

B: There's the book on the table. (Abbott 1993:44)

変項はもっぱら、成員になる。つまり値が定まっていない変項( $x$ )が、カテゴリーに存在する。この変項にはそれを満たす値が必要となる。変項の値は、主語名詞句になるが、その主語名詞句は、新情報のみならず、旧情報にも位置することがある。主語名詞句がどこに位置していようとも、(3)で述べたように、関わる情報の何かが新情報にあればよい。

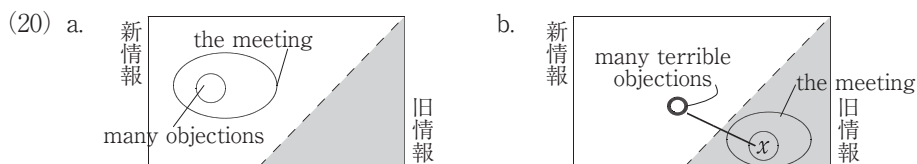
この変項という概念を用いるとき、(19a)(19b)の違いを説明することが可能となる。安藤(1991)は(19a)では文全体が新情報で、(19b)は主語名詞句のみが新情報であると述べている。

- (19) a. There developed many objections at the meeting.

b. There developed at the meeting many terrible objections. (Milsark 1974:248)

つまり<at the meeting>の位置により、何が新情報に違いが生じる。これを変項を通して考えると、(19a)には変項がなく、(19b)には変項があると考えることができる。図示したものが、(20)である。





(20a)では成員 (many objections) とカテゴリー (the meeting)、両方とも新情報に位置し、変項はない。そのため文全体が新情報として提示される。一方(20b)ではカテゴリーと成員は旧情報にあり\*4、成員が変項( $x$ )となっている。変項の値である主語名詞句 (many terrible objections) のみが新情報にある。何があったかという、many terrible objections だということを新情報として提示している。

このように語順の違いによる新情報の違いは、主語名詞句が文末にくることで、強調され、変項( $x$ )の解釈になり、(20b)のスキーマになると説明できる。変項を用いることで、構文解釈や成り立ちについての説明が可能となる。次節以降でそれらを見ていく。

### 4.3 定性制限に関わる there 構文

意味上の主語名詞句(以下、主語名詞句)には、定性制限がかかると言われてきた。不定名詞句は適格であるが、定名詞句や固有表現などは不適格になるというものである(例は鈴木(1977: 83))。

- (21) a. There was a shadow in the dark.                      c. There's another possibility.  
       b. There's a plaster duck in the garden.                d. There was a surprising odor in the closet today.
- (22) a. \*There was the shadow in the dark.                    c. \*There's the possibility.  
       b. \*There's the plaster duck in the garden.              d. \*There was the surprising odor in the closet today.

しかしながら、これまで定冠詞や固有名詞が現れる例は数多く指摘されてきた。定性制限がどういう意味を持ち、そもそも制約として必要かどうかも含めて考察する必要がある。以下具体例を通して、there 構文における定性表現を、カテゴリーの観点から考察していきたい。

#### 4.3.1 後置修飾語による定性表現

鈴木(1977)をもとに、後置修飾語による定性表現を3つ考察する。一つめは、「前置詞 of + 名詞句」という後置修飾語を伴う場合で、(23)のような例がある。

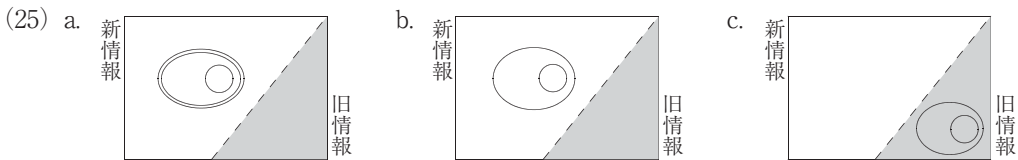
- (23) a. There's the possibility of improving the defects of the theory.  
       b. There happened the destruction of the city by the guerrilla yesterday.  
       c. There was the sound of a band playing rock 'n' roll music.                      (鈴木 1977:85)

鈴木(1977)は、of 前置詞句が後置修飾する場合、通例名詞句は定冠詞をとると Quirk-Greenbaum(1973)から引用し、これら定名詞句は、不定名詞句に近い意味的特徴をもっていると述べた。そして(24)のように、主要名詞に前置修飾語が付くなら、重要な意味の変更なしに不定冠詞が生じる例をあげ、不定名詞句的な意味を確認している。



- (24) a. There's a very fair possibility of improving the defects of the theory.  
 b. There happened a merciless destruction of the city by the guerrilla yesterday.  
 c. There was a violent sound of a band playing rock 'n' roll music. (鈴木 1977:85-6)

鈴木(1977)では意味的に不定名詞句に近いことで、適格となるとしているわけだが、本稿でいけば、成員とカテゴリーが強く結びついており(二重線)、新情報に現れていると考える((25a))。つまり強い限定によって成員とカテゴリーの結びつきが強くなり、定冠詞がついたと考える。定冠詞はついたが、新情報の提示という(3)を満たしているので、適格となる。一方それ以外の前置詞は、of 前置詞句ほど名詞句を強く限定しないため、(25b)(一重線)となり、定冠詞が使われることはない。ちなみに(24)は、前置修飾語がつくことで、一つの種類(一成員)と見なされる度合いが高まり、(25b)に移行したと考える。なお(22)で不適格となった例は、カテゴリーと成員が旧情報にあるため、スキーマ(25c)で示すように、提示すべき新情報がない。これは(3)と矛盾するため、不適格となる。



2つめに関係節を伴って、定冠詞がつく(26)のような例がある。この場合、関係節によって先行詞が強く限定され定冠詞がついていると考えられる。ここでも鈴木(1977)はこの定冠詞名詞は、不定名詞句に近い特徴をもつと述べている。本稿では of 前置詞句と同じく、(25a)のスキーマになると考える。つまり限定により、カテゴリーと成員の結びつきが強くなり、定冠詞がついたと考える。

- (26) There's the same plaster duck in the garden that there was ten years ago. (鈴木 1977:86)

3つめは同格節を伴う場合になる((27))。同格節をとる場合には、通例、名詞句は定冠詞つきとなる。ここでも鈴木は同格節により名詞句が限定されており、不定名詞句に近い意味を持つと考えている。本稿では上記2つと同様に、(25a)のスキーマになると考える。同格節により限定されて、成員とカテゴリーの結びつきが強くなり、定冠詞がついたと考える。

- (27) a. There's the possibility that the cost of products will be increasing.  
 b. There's the claim that there is not such a rule as raising. (鈴木 1977:88)

以上後置修飾語により定冠詞がつくのは、カテゴリーとその成員の結びつきが変わったことを示しているだけである。(25a,b)に示すように、基本的なスキーマ関係は同じである。結びつきの強さが違うため、二重線か一重線かの違いになっている。いずれにせよ(3)を満たすので適格となる。

#### 4.3.2 前置修飾語による定性表現

ここでも鈴木(1977)をもとに、前置修飾要素のために定冠詞がつくものを2つ見ていく。一つ

目は、最上級に定冠詞がつく例で、(28)の例のようなものがある\*5。

(28) a. There was the most surprising odor in the closet today. (鈴木 1977:88)

b. There's the oddest-looking man standing at the front door! (Quirk-Greenbaum 1973:419)

これらは Rando and Napoli(1978:301)が remarkable reading というように、強調の意味であつて、意味上は不定冠詞と同等である(cf. 安井 1987:516, 村田 1982:313-314)。ここでは4.3.1とは異なり、成員とカテゴリーが強く結びついているわけではない。強調によって限定され、定冠詞がついている。そのためスキーマは(25b)になる。このとき(3)で要求されている、カテゴリーと成員に関わる新情報としての提示を満たしており、適格な there 構文となる。

2つめとして、鈴木(1977)が最上級以外で、名詞を限定化する前置修飾語として、main, precise, only, very, same, chief, greatなどをあげているものを見る。例は(29)になる。鈴木(1977)は、これらは最上級と同様に不定冠詞をとることができないため定冠詞がついており、意味的には不定冠詞に近い特徴を持っていると説明している。

(29) a. There's the very book which I've been looking for under the table.

b. There's the same watch that I lost in the closet.

c. There's the main thesis in chapter nine. (鈴木 1977:89)

ここでも最上級と同様に、後置修飾語によって限定されたために定冠詞がついたわけではない。前置修飾により限定され定冠詞が選ばれているにすぎない。つまりスキーマは(25b)であり、(3)と矛盾しない。そのため適格な there 構文になると考えられる。

以上後置修飾語による定冠詞と前置修飾語による定冠詞を見てきた。この両者は全く異なる仕方定冠詞がつけられる。しかしながらどちらも there 構文に要求される(3)を満たすとき、定冠詞がつくつかないに関係なく、適格な there 構文になる。

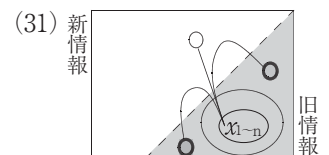
### 4.3.3 リスト存在文

それ以外に主語名詞句が定冠詞をとるものに、リスト存在文がある。この文は、通常存在を表す there 構文と様々な点で異なる。そのため通常存在を表す there 構文とは別に考慮する必要があるとの議論もある。しかし本稿は統一的に扱うことを考えており、リスト存在文の成員は変項( $x$ )であると主張していく。

リスト存在文では、主語名詞句で述べられるリストは、何らかの質問の答えであつたり、分からなかったものを列挙し提示している。つまり主語名詞句は変項( $x$ )になっている\*6。リスト存在文の例が(30)で、スキーマが(31)になる。

(30) A: What's worth visiting here ?

B: There's the amusement park, nice restaurants on the beach,  
and the museum on the wharf. (熊本 2001:112)



(31)では旧情報に、カテゴリーと成員(変項( $x$ ))が含まれている。何かあるが、それが何かは分からないという状況にある。ここで変項が $x_{1-n}$ とあるのは、変項の値が1~ $n$ 個であることを

示している。変項は値と結びつけられるなければならないので、この  $n$  個は最小でも 1 以上の数となる。存在しない場合は、値は  $\phi$  (ゼロ) と結びつくと考える\*7。(31)では、焦点があたり表現されるものが太線で表現されている。必ずしもすべてが表現される訳ではない。

値そのものは、旧情報にあっても、新情報にあってもよい。ただし(3)で示したように、there 構文では、成員とカテゴリーに関わる新情報を提示しなければならない。本稿では、Rando and Napoli(1978)がいうようにリンク(値と変項を結ぶ線)が新情報となると考える(cf. 中村 1980)。いわば関係づけが、新情報と言える。つまり通常の there 構文では、成員または変項の値のいずれかが新情報になる。つまり値も含めて、〈モノ〉が新情報として提示される。一方リスト存在文の場合、モノではなく〈関係〉が新情報になっている。そのためこの2つは様々な点で違いが生じるが、違いは新情報の種類の違いであって、(3)に示す要件は同じと言える。よってリスト存在文を例外的に扱う必要もなく、there 構文はその種類に関係なく、統一的に説明されると考える。

なおリスト存在文で付け加えておきたいことがある。リストは網羅的でなくてもよいことである。リストすべてが文中に現れる必要はない。複数の文にまたがって表記されてもいいし、リストの一部を提示しても良い。(32)ではリストが後半で追加されている。

(32) Ms A: How many can we get for our group?

Mr B: Well, there's Tom, and Gladys, and Lucille...

Ms A: Let's not forget Bill.

Mr B: Oh, yes, there's him – and there's you and me – that ought to make up the number we need. (Bolinger 1977:116)

大切なのは、変項と値の結びつけが少なくとも  $1 \sim n$  個までで行われることにある。そのためすべてリストアップする必要もなければ、文をまたがってもよいことになる。

ここでリスト存在文と it 分裂文を比較したい。中村(1980:501)はリスト存在文を there 分裂文とみなし、it 分裂文と there 構文が似ている点を列挙している。1. 両方とも埋め込み文は制限的關係節ではない(固有名詞を修飾できるため)。2. 両方とも埋め込み文では主語の wh が削除できる。3. 両方とも縮約構造をとることができる。4. 両方とも埋め込み文を前提としており、談話を始める文としては用いられない。5. 両方とも be 動詞の後位置は焦点であっても、新情報を表さない。新情報なのはある項目を焦点の位置で同定することとしている。以上の共通性はスキーマの類似性からくると考える。(33)に it 分裂文、(34)にリスト存在文の例をあげる(どちらも中村 1980:501)。そして it 分裂文のスキーマを(35)と考える。

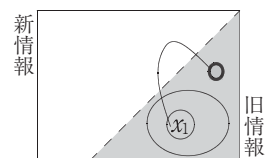
(33) A: Who was Mary speaking to?

B: It was John (who Mary was speaking to).

(34) A: There's John who might be able to help us.

B: There was John who broke the window.

(35)



リスト存在文と it 分裂文をスキーマを通して比較する。(35)も(31)も、(i)カテゴリーと成員が旧情報にあること、(ii)成員が変項であることが共通している。またどちらも変項の値は、新

情報にあっても旧情報にあってもよい((35)は旧情報にある例)。

ただ両者が決定的に違うのは「it 分裂文はそのリストの中の項目の一つを唯一的に (uniquely) 指定する」のに対して「there 分裂文の場合、there の不定詞性によりそのリストの項目が唯一的に指定されることはなく、意味上、そのリストの項目は一つに絞られない。したがって、リスト、列挙等々の読みが生ずる」ことにある(中村 1980: 502)。リスト存在文のスキーマは(31)ですでに示したが、それとの違いは、変項の数の違いである\*<sup>8</sup>。リスト存在文の変項は  $x_{1-n}$  で、it 分裂文の変項は  $x_1$  になる。つまりリスト存在文であれば1個からn個まで何個でもよく、さらには  $\phi$  (ゼロ)の値をとることもできる。一方 it 分裂文の場合、値は必ず1個になる。しかも変項の値が  $\phi$  (ゼロ)になることはない。もし  $\phi$  であれば、そもそも構文が成り立たないからである。むしろ変項と値を結びつけた後で、それを否定することはできる。

ここでの主張は、リスト存在文と it 分裂文の類似性は、とりもなおさず、スキーマの類似性からくる、になる。そして違いは変項の種類、もっと言えば、変項の数と、値に  $\phi$  (ゼロ)をとるかどうにかかってくる。it 分裂文では、強調のために、すでに実際は聞き手が知っていることであっても、あたかも新情報のように提示するのが目的であり、そこには変項がある。その値と変項の結びつきが、リスト存在文と同様に、新情報なのである。

#### 4.4 その他

There 構文で、これまでに取り上げなかった主語名詞句の後置修飾語に次のようなものがある。これら後置修飾語に定冠詞はつかないが、いくつかの制約が働くことがある。

- (36) a. There was a car blocking my way. (現在分詞)  
b. There are peasants murdered every day. (過去分詞)  
c. There are three pigs loose. (形容詞) (安藤 2005:762-763)

まず主語名詞句での、一時性の問題がある。主語名詞句に後続する後置修飾語は、「恒久的な性質をもつものではなく、一時的な状態を表すものでなければならない」(安藤 1991: 20)。

- (37) a. There were several students ill / \*tall.  
b. There are three pigs loose / \*stupid. (安藤 1991:396)

- (38) \*There was a Canadian a good doctor. (安井 1996:813)

(37)の tall や stupid、及び(38)の a good doctor は恒久的な性質であり、一時性に違反する。確かに一時性の制約が働いているかのように見える。しかし本稿ではこうした一時性を定義や制約に組み込む必要はないと考える。

というのも主語名詞句が、カテゴリーの成員になれるかどうかで適否を説明できるからである。(37a)では、主語名詞句(students)の tall は属性、ill は状況であることが分かる。つまり tall は、カテゴリー(students)の属性成員(tall)であって、主語名詞句と後置修飾語の関係が反対になっている。つまり主語名詞句 students を含むカテゴリーが存在しない。(37b)(38)も同様の理由で不適格になる。一方 ill の場合は、ill の状況・状態に、students が移動して存在するという

関係になる。このとき主語名詞句は成員、*ill* がカテゴリーとなるので、適格となる。

すなわち恒久的な性質であれば、主語名詞句の属性を表すこととなり、カテゴリーと成員の関係が反対となり、主語名詞句を含むカテゴリーが存在しなくなる。そのため(3)と合致せず、不適格になる。一方一時的な性質であれば、そうした状況の中に、主語名詞句が存在することを提示する。そのため適格になると考えられる。カテゴリーという概念を導入することで、一時性という制約をもうける必要はない。

なお文末に一時的解釈を示す *now* は付加できるが、*for ever* は付加できない (松井 2011:88)。  
(39) There is a pilot in the cockpit now / \*for ever. (松井 2011:88)

これも *for ever* が付加することで、*in the cockpit* が *pilot* の属性成員となり、カテゴリーと成員の関係が逆転し、主語名詞句が含まれるカテゴリーがなくなる。そのため不適格となる。

また *all* や *every* といった全称数量詞が主語名詞句につかないことが指摘されている (Milsark 1974, Quirk *et al.* 1985, 安藤 1991 他)。

(40) a. \*There are all/both dogs in the room.  
b. \*There is every/each dog in the room. (Milsark 1974:195)

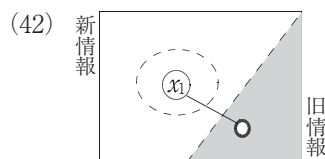
これもカテゴリー分析で説明される。そもそも全称数量詞は、母集合の中に占める割合を表す数量詞である。つまり母集合は前提となっており、旧情報に位置する。つまりカテゴリー (*in the room*) も *dog(s)* も旧情報の中に含まれており、提示すべき新情報がない。このとき(25c)のスキーマになり、不適格になると考えられる (cf. 西山 2005:171)。

以上主語名詞句を見てきたが、ここでの主張は、定性制限などさらに追加する制約はなく、(3)ですべて説明できるとする。そもそも定性とは何かという本質的な問題もあるが、*there* 構文においては、聞き手にとって新情報を提示することであり、それは名詞に定冠詞がつくかどうかは関係がない。成員とカテゴリーという概念によって、一時性の問題、数量詞の問題も扱うことが可能となる。また変項という概念を用いることで、語順による焦点の違い、リスト存在文も統一的に扱うことが可能になると考える。

## 5. 存在するかどうかを表す実在文

存在するかどうかを表す実在文がある。後置修飾語があることもあるが、ないことが多い。このときスキーマは(42)のようになる。と考える。

- (41) a. There is a God.  
b. There was a sudden noise. (Quirk *et al.* 1985:1406)  
c. There is a Santa Claus.



(42)では、カテゴリーと成員(変項)がともに新情報にあり、変項がその値と結びつけられている。カテゴリーと成員との結びつきは弱く(破線)、変項( $x_1$ )がリンクする個数は1のみである。(42)では変項は、旧情報にある値と結びついているが、新情報の値と結びついてもよい。基本、

変項の値のみに焦点があたる。存在しない場合は、結びつけた後に否定される。カテゴリーに属する単なる一成員であるため不定冠詞が用いられている。

## 6. まとめ

本稿では、there 構文をカテゴリーの観点から考察した。結論は(3)に示したように、カテゴリーと成員に関わる情報を、新情報として聞き手に提示するのが there 構文とした。存在を表す構文は、there 構文に限らず、be 構文や have 構文がある。また日本語においても、さまざまな表現がある。ここで用いたカテゴリー分析を用い、存在表現を日英で比較しながら考察することを、次の課題としていきたい。

### 注

- \*1 扱う構文は必ずしも網羅的なものではない。西山(1994: 117)が、場所表現を伴うタイプを5種類、場所表現を伴わないタイプを5種類あげている。本稿では取り上げないが日本語の存在文、あるいは英語の他の存在文と比較する上で、there 構文の分類を明確にできると考えている。今後の課題としたい。
- \*2 主語名詞句は、出来事の発生を表すことがある。影山(2004)は名詞の種類、時制、副詞の付け方などによって、出来事が発生していることを表すことがあるとする(例は(i))。これは(12b)に相当し、カテゴリー内への移動の意味が加味されるため、出来事的な意味が生じると考えられる。
  - (i) a. There has just been {a visitor/#a man}. (McNally 1997:180)
  - b. What happened yesterday was that there was a {visitor/\*woman}. (McNally 1997:189)
- \*3 移動を表す前置詞句は文頭にくることも可能である。ただし主語名詞句の後ろに離しておくと非文または容認性が落ちることが指摘されている。
  - (i) *Into the room* there ran a man. (松井 2004:3)
  - (ii) ?There walked a unicorn into the room. (安藤 2005:763)
- \*4 Birner and Ward(1998:15)は情報構造を4種類に分類する。
  - (i) a. Hearer-old, discourse-old                      c. Hearer-new, discourse-new
  - b. Hearer-old, discourse-new                      d. Hearer-new, discourse-oldそれ以外にも新情報・旧情報は研究者によって細分化され、他要因を加えることで緻密な分析がなされている。しかし there 構文に関しては、新情報・旧情報の分類のみで説明が可能と考える。
- \*5 最上級が現れる場合、それが通常存在文であるかリスト存在文かによって異なる(cf. Rando and Napoli 1978)。通常最上級であれば、リスト存在文のみに現れる。
- \*6 文脈により変項があるかないかが決まり、there 構文の適格性に影響を及ぼす。
  - (i) A: I had a really great time last night.



B: #There was Mary, Sue, Fred, Mat, and Sam at the party I went to.

(Huddleston & Pullum 2002: 1400)

(i)では「昨夜楽しかった」という文脈しかなく、パーティの参加者が変項となる土壌がない。そのため変項がないリスト存在文になっており、不適格となる。

\*7 高橋(2006: 52)はリスト存在文(i)と、所在文(ii)の違いを述べている。

(i) A: Who was at the party last night?

B: There was Mary, Sue, Fred, Matt, and Sam. (Huddleston & Pullum 2002:1400)

(ii) A: Who was at the party last night? B: Mary, Sue, Fred, Matt, and Sam were. (高橋 2006:52)

(i)と(ii)はともに、参加メンバーの存在を述べているが、参加者が存在したことを(i)では前提としておらず、(ii)では前提とすると述べている。つまりリスト存在文の場合、変項の値は $\phi$ (ゼロ)もありうることになるが、所在文では、変項の値に $\phi$ (ゼロ)はない。これはit分裂文との違いにもつながる。

\*8 There 構文では、名詞句以外のものも意味上の主語名詞句に現れることができる。しかし(ii)にあるようにit分裂文の方が、there構文よりも許容範囲が広い。これは主語名詞句(成員)が、カテゴリー内に存在するという理由からくる。非文になるのは、主語名詞句が後置修飾語の成員になれないからと考えられる。そのためこの違いは(3)で自然に説明され、制約を追加で課す必要はない。

(i) a. There's under the stove that still needs dusting.

b. There's when you were away that it might have happened. (Davidse 2000:1117)

(ii) a. It's to John that you should give it. c. It's flighty that she is.

b. ?There's to John that you should give it. d. \*There's flighty that she is. (Davidse 2000:1117)

## 参考文献

- Abbott, B. 1993. "A pragmatic account of the definiteness effect in existential sentences," *Journal of Pragmatics* 19, pp. 39-55.
- 安藤貞雄. 1991. 「存在文再考 - 1 -」『英語青年』137(7), pp. 342-344.
- . 1991. 「存在文再考 - 2 -」『英語青年』137(8), pp. 396-398.
- . 2005. 『現代英文法講義』開拓社.
- Birner, B. and Ward, G. 1993. "There-Sentences and Inversion as Distinct Constructions: A Functional Account," *Proceedings of the Nineteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp. 27-39
- . 1998. *Information status and noncanonical word order in English*. Amsterdam and Philadelphia: J. Benjamins.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*, London: Longmans.
- Davidse, K. 2000. "A constructional approach to clefts," *Linguistics* 38, pp. 1101-1132.
- Huddleston, R. and Pullum, G. K. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. U.K.: Cam-



bridge University Press

- 影山太郎. 2004. 「存在・所有の軽動詞構文と意味編入」『日本語の分析と言語類型』くろしお出版.
- Kayne, R. 1979. "Rightward NP Movement in French and English," *Linguistic Inquiry* 10, pp. 710-719.
- Kimball, J. 1973. "The grammar of existence," In *Papers from the Ninth Regional Meeting, Chicago Linguistics Society*. pp. 262-270.
- 熊本千明. 2001. 「リスト存在文の解釈について」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』6-1, pp. 111-127.
- Lumsden, M. 1988. *Existential Sentences: Their Structure and Meaning*. London: Croom Helm.
- 松井千枝. 2004. 「There 構文の意味と文体の研究」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』34, pp. 1-13.
- . 2011. 「存在文 - there 構文と be 構文と have 構文」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』41, pp. 81-92.
- McNally, L. 1997. *A Semantics for the English Existential Construction*. New York: Garland Press.
- . 1998. "Existential sentences without existential quantification," *Linguistics and Philosophy* 21, pp. 353-392.
- Milsark, G. 1974. *Existential Sentences in English*, Ph.D. dissertation, MIT.
- 村田勇三郎. 1982. 『機能英文法』大修館書店.
- 中村捷. 1980. 「There 分裂文」『英語青年』125(11), pp. 500-502.
- 西山佑司. 1994. 「日本語の存在文と変項名詞句」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』26, pp. 115-148.
- 西山佑司. 2005. 「絶対存在文と帰属存在文の解釈をめぐって」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』36, pp. 161-178. 慶応義塾大学言語文化研究所.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Quirk, R. and S. Greenbaum. 1973. *A University Grammar of English*. Harlow: Longman.
- Rando, E., & Napoli, D. J. 1978. "Definites in there-sentences," *Language* 54, pp. 300-313.
- 鈴木英一. 1977. 「存在文の意味上の主語と定性・不定性」『山形大学紀要. 人文科学』8(4), pp. 81-107.
- 鈴木英一・安井泉. 1994. 『動詞』現代の英文法 8. 研究社.
- 高橋順子. 2006. 「There 構文に現れる定名詞句について」『湘南国際女子短期大学紀要』13, pp. 43-55.
- 高見健一・久野暉. 2002. 「There 構文と非対格性」『日英語の自動詞構文』研究社.
- 安井稔 (編). 1996. 『コンサイス英文法辞典』三省堂.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)